様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００６３２

研究課題名（和文）アクセント体系変化後の文献を中心とした日本語アクセント史研究の総括と展開

研究課題名（英文）Review and Development of Studies on the History of Japanese Accents, Focusing on Literature after the Change of the Accent System

研究代表者
坂本　清恵（SAKAMOTO, Kiyoe）

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：５０１６９５８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はアクセント体系変化後に焦点をあて、文献によるアクセント研究の蓄積を総括し、発展的継承をすることを目的とした。具体的には、『名語記』『色葉字類抄』『日本書紀抄』、因空自筆本『朗詠要抄』、『名目抄』、平曲資料、謡本、長唄浄瑠璃などの資料について批判的に検討した。また、アクセント表記法とそこから読み取れるアクセントについて考察するとともに、近世期の謡伝書、伊勢貞丈、富士谷成章、契沖などの四声観について整理検証を行った。特に漢語アクセントについては、総合的な研究を行いつつ、漢語アクセントの類別を再検討することができた。文献によるアクセント資料の応用的研究を促すことにつながった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文献によるアクセント研究の研究史を総括して、現代における到達点を明示したことにより、今後のアクセント研究の一つの立脚点となり、研究そのものの質的向上に資することになった。アクセント表記法とそこから読み取れるアクセントの実態と四声観を整理、解説したことで、新たにアクセント研究を心志す人に対する導入とすることができた。同時に資料と研究の文献目録の作成が必要であることも確認できた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to summarize the accumulation of accent research in the literature, focusing on the period after the change in accent systems, and to develop and pass on the research results to future generations. Specifically, we critically examined the Myogoki, Irohajiryosho, Nihonshikisho, Inku's own writing, Roeisho, Myoumokusho, Heikyoku materials, chant books, Nagauta joruri, and other materials. In addition,we examined accent notation and the accents that can be read from it, and organized and verified views on the four tones in early modern in early modern sources such as by Ise Teijo, Fujitani Nariakira, Keichu and others. In particular, while conducting a comprehensive study of Chinese accents, we were able to reexamine the classification of Chinese accents. This research has encouraged and contributed to the applied study of accent materials in the literature.

研究分野：日本語音韻史

キーワード：文献アクセント史　アクセント体系変化　四声観　漢語アクセント　アクセント表記法　近世期アクセント

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本語音韻史・アクセント史の研究は、すでに新出資料による新たな知見が期待できないほどに進捗したこともあって、これまでの研究業績の見直しが主流になろうとしている。文献による日本語アクセント史研究もその例外ではない。これまで、基盤研究（C）「文献による日本語アクセント史研究の総括と展開」として、古代アクセントについての研究を進めてきた。この研究はこれまでの古代篇（奈良から鎌倉）に対して、近代篇（室町から現代）としての研究である。アクセント体系変化後は、日本語のアクセント観は「文字単位」から「語単位」のそれに変容したと言われ、新しい四声観、アクセント観による「新式声点」やアクセント記述が表れてくる。そこからどのようにアクセントを推定し、アクセント史を構築するのかを、改めて検証していくことが本研究の核心をなす学術的な「問い」である。

本研究の学術的背景としては、以下の 4 点が挙げられる。

①100 年におよぶ近代的アクセント史の研究の蓄積とその総括とその発展的継承の必要性
②文献アクセント史研究によるアクセント体系変化後アクセントの記述の必要性
③アクセント史に言及する研究に対する文献アクセント史研究からの批判的検討の必要性
④文献アクセント史研究の応用（解釈学的研究、文献学的研究、芸能史的研究、日本語学研究〈音韻史・音調史的研究〉への貢献）の必要性

アクセント資料(アクセントを反映するあるいはアクセントが注記された文献資料)を用いた研究では、その文献の成立年代や写本相互の関係などの文献学的研究や、アクセント注記者の特定・アクセント注記の目的などの考察が不可欠となる。これらの基礎的な研究の後にはじめてアクセント史資料としての性格を確定し、日本語学の資料として扱うことが可能となる。また、アクセント体系変化後については、文献と合わせて、現在伝承の音楽資料を研究の補助として考察を進めていく必要性もある。

①③については文献目録の作成と研究史の整理、②については文献アクセント史研究を行う上での注意(アクセント記号や術語の解説を含む)と各資料の文献学的な解説などを作成する。以上①から③によってアクセント史研究の到達点を明らかにし、④の文献アクセント史の応用研究を促すことが本研究の学術的背景である。

２．研究の目的

本研究の目的は、研究史を総括して、現代における到達点を明示することにより、今後のアクセント研究の一つの立脚点となり、研究そのものの質的向上に資することと、あらたに文献アクセント史研究に志す人に対する導入として、今後のアクセント研究に、いくつかの方向を提案し、さらなる発展的研究・応用的研究に示唆を与えることである。

近年のアクセント史に関する学史的研究を含む研究成果には以下のものがある。

金田一春彦(1974)『国語アクセントの史的研究　原理と方法』(塙書房)

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊編(1998)『日本語アクセント史総合資料　研究篇』(東京堂出版)

金田一春彦(1974)は日本語アクセント史研究を主導した著者による総合的研究書であり、アクセント史資料についての解説もなされている。しかし、個々の記述には、詳細に研究された上に記述されたものと、そうでないものが含まれていて、現在の研究からは必ずしも妥当でない研究成果もみられる。

秋永一枝・他(1998)は第１章として「アクセント史資料解題」を設け 41 種類のアクセント資料に関して資料ごとに解説が加えられている。そこでは「資料番号、資料名(よみ)、《略称》／(諸本)巻冊、所蔵者、書誌説明(ただしアクセント注記に関係するものを中心とする)／◎アクセント注記様式など・反映するアクセントの時代や地域／以下〔記入担当者〕【依拠文献】【参考文献】」を記し、さらに「【原】原本を閲覧したもの。【影】写真または複製本を閲覧したもの」の情報が付されている。このアクセント史資料解題は先行研究を踏まえて執筆されたものであるが、必要最小限の解説を行ったものであり、アクセント史研究に必要な情報のすべてが記されているものではない。また、1998 年以降の研究の進展により、改定すべき点も数多く出てきている。

以上の研究成果を基礎に、アクセント体系変化後の文献によるアクセント推定方法の見直しと、アクセント体系の見直しを行う。

新式声点や個別のアクセント表記が示す調値やその音韻論的解釈は容易ではなく、研究の余地はまだ多く残されている。本研究の成果がアクセントや日本語史に興味をもつ多くの研究者にとってより開かれた存在となることを目指す。

３．研究の方法

研究目的で示した内容について、具体的には以下を明らかにする。

① 無視または忘却された研究成果の発掘と紹介
② 複雑に錯綜する研究成果の整理、批判的検討と再評価
③ これまでの研究の到達点としてのアクセント史の記述
④ 応用的研究の発掘と展望

次表のように文献資料について担当者を定め、資料とテーマという二つの局面から検討する。それぞれの担当資料について原典または影印による文献学的研究をおこなう。それぞれに担当する文献資料についての研究文献・論文を博捜して整理し、その記述内容について批判的に検討する。またこれらの過程で、問題となる研究テーマについて批判的に討議検討を加えつつ、文献ごとに詳細で網羅的な研究文献目録を作成し、研究史の整理を行う。

	資料研究の分担	テーマ研究の分担	記述研究の分担
坂本清恵	能（世阿弥・禅竹・禅鳳）資料・浄瑠璃（義太夫・長唄）資料	胡麻章・文字譜とアクセントとの関係・アクセント仮名遣いの確認	室町・江戸・明治
上野和昭	名目抄および平曲譜本、言語国訛など平曲関係資料	節博士と音調との関係	室町・江戸
佐藤栄作	名語記 池田要・楳垣実の資料	音調表記の変遷と解釈	室町から現代
鈴木豊	日本書紀抄などの注記類	声点から濁点への変遷	室町
加藤大鶴	辞書資料及び、声明論議資料	漢語の声点と音調の関係	室町から現代
山岡華菜子	和字正濫鈔・稿本あゆひ抄・和字大観抄	国学者の四声観とアクセント	江戸

４．研究成果

① 研究資料である文献についての研究

研究期間中に、鈴木豊『日本書紀声点本の研究』（2020 年　勉誠出版）、上野和昭『名目鈔声点本の研究』（2021 年　武蔵野書院）、坂本清恵編『長唄の伝承―旋律形成に関する学際的研究』（2023 年　檜書店）を上梓し、それぞれの研究資料についての新知見を示した。

アクセント体系変化前の資料の扱いの難しさについての見解が示された。加藤大鶴によって因空自筆本『朗詠要抄』の博士譜に反映する体系変化前のアクセントを解明された。『名語記』のアクセント研究については、近年、報告された紙焼き写真の存在が確認されたことを受け、佐藤栄作が声点よる現時点での報告と、研究が新たな段階を迎えたことを明らかにした。鈴木豊は清原宣賢自筆『日本書紀抄』における濁音表示について、平安時代から伝承された声点と京都アクセントの体系変化を反映する新しい声点やアクセントを表示しない濁点が混在していることが明らかにした。

アクセント体系変化後については、上野和昭により平曲譜本おける助動詞の接続についてと論議書における出合の状況が解明された。また、坂本清恵による長唄正本の研究から、長唄に関連した一節切の譜もアクセント資料としての活用の可能性があることが分かり、また、室町末期謡本の胡麻章のアクセント資料としての可能性が示された。

② アクセント体系変化後のアクセント研究における重要テーマについての研究

漢語アクセントについては、加藤大鶴が尊経閣文庫蔵『色波字類抄』（三巻本）における去声＋去声の連接と後項の「声調」変化について分析を行った。さらには、奥村「漢語アクセント類別語彙」の検証を行うために、20 世紀初中期に刊行された辞典における漢語アクセントの基礎的分析を行い、漢語類別語彙が新たな段階に入った。

文献アクセント史研究から構築されるアクセント体系変化後アクセントの記述的研究、さらにその発展的・応用的研究としては、佐藤栄作がアクセント体系の把握方法と表記法についての詳細な研究を行った。

近世期の文献の中でもアクセント史の資料としてその四声観が用いられることの多い契沖・

釈文雄・本居宣長の記述については、これまでも山岡華菜子が中心で研究を行ってきたが、それらが後世どのように継承されたかについて、近世後期の国学者である鶴峯戊申をはじめとして、とくに四声の記述に関してその一端を明らかにした。富士谷成章『稿本あゆひ抄』について、これまで必ずしも明らかにされてこなかった成章独自の術語について考察し、アクセントの記述方法について確認した。

さらに、近世以降の四声認識については、上野和昭が、伊勢貞丈について、平声を「もとすゑ同じほど」としながらも、日本語の上昇調も下降調もはっきりとしたものではなく、中国の平声の範疇におさまる、というようなことも述べられていることを確認した。また、芸能書としては、平曲伝書の一つである『言語国訛』には、「平上ノ間へ響」のような記載があり、日本語の音調が四声の枠組みにおさまらないことが示された。謡曲伝書の『謳曲英華抄』（二松軒）は契沖『和字正濫鈔』の影響が著しく、平声の文字でも「移る文字」によって上昇することもあり、下降することもあることを述べている。近世における四声論は、現代的視点からは理解しにくいことが明らかになった。

金田一春彦がアクセント資料となる第七種の文献としたいわゆる定家仮名遣いについては、坂本清恵が、御子左家の歴世（俊成、定家、為家、為相）、室町期謡本について検証を行ったが、平仮名の世界ではアクセント体系変化後の資料となるものは、長慶天皇の『仙源抄』以外にはなく、訓点資料にその可能性が残されていることを示した。

なお、当初予定していた、文献ごとに詳細で網羅的な研究文献目録を作成については、未完である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計27件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　20件）

１．著者名 坂本清恵	４．巻 100-3
２．論文標題 謡と定家仮名遣い	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国語と国文学	６．最初と最後の頁 58-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 加藤大鶴	４．巻 41-2
２．論文標題 アニメ『ドラゴンボール』における「気」のアクセント―漢語アクセント形成史の断線から―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本語学	６．最初と最後の頁 92-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂本清恵	４．巻 17
２．論文標題 長唄《鷺娘》の旋律にみるアクセント ―― 一節切譜と三味線譜から ――」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 論集	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上野和昭	４．巻 17
２．論文標題 文献による助動詞アクセント研究覚書――平曲譜から助動詞の独立性を検証する――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 論集	６．最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木豊	4．巻 17
2．論文標題 清原宣賢自筆『日本書紀抄』における濁音表示	5．発行年 2022年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 59-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐藤栄作	4．巻 17
2．論文標題 前尾記念文庫『名語記』の声点―勉誠社刊『名語記』との比較を中心に―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 37-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加藤大鶴	4．巻 17
2．論文標題 因空自筆本『朗詠要抄』博士譜に反映する体系変化前のアクセント	5．発行年 2022年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂本清恵	4．巻 61
2．論文標題 明和改正謡本における舌内入声音と連声の注記	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国文目白	6．最初と最後の頁 32-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 上野和昭	4．巻 1
2．論文標題 論義書にみえる出合の資料性について	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論集』第１冊「言葉のしくみ」	6．最初と最後の頁 19-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 加藤大鶴	4．巻 1
2．論文標題 漢語アクセントの歴史的連続性についての語彙的検討	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論集』第１冊「言葉のしくみ」	6．最初と最後の頁 49-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂本清恵	4．巻 16
2．論文標題 御子左家歴世と仮名用法－ 俊成・定家・為家そして為相	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6．最初と最後の頁 21-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 坂本清恵	4．巻 16
2．論文標題 長唄正本の胡麻章	5．発行年 2021年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坂本清恵	４．巻 146
２．論文標題 アクセント仮名遣いの淵源	５．発行年 2021年
３．雑誌名 訓点語と訓点資料	６．最初と最後の頁 92-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上野和昭	４．巻 16
２．論文標題 近世四声論拾遺	５．発行年 2021年
３．雑誌名 論集	６．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤栄作	４．巻 16
２．論文標題 アクセント資料としての『名語記』再検討ー新たな『名語記』研究へー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 論集	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 加藤大鶴	４．巻 191
２．論文標題 同床異夢の去声―上昇調と上昇拍の低起性を中心に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国文学研究	６．最初と最後の頁 144-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加藤大鶴	4．巻 16
2．論文標題 「出合」における「去声字に後接する去声字」再考―漢語アクセントの形成という観点から―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 13-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山岡華菜子	4．巻 16
2．論文標題 富士谷成章『稿本あゆひ抄』のアクセント表について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂本清恵	4．巻 15
2．論文標題 室町末期謡本の胡麻章	5．発行年 2020年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坂本清恵・配川美加・高桑いづみ・星野厚子	4．巻 69
2．論文標題 アクセントからみた長唄《英執着獅子》と《越後獅子》	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本女子大学紀要　文学部	6．最初と最後の頁 25-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 上野和昭	4．巻 15
2．論文標題 名目鈔声点本研究の経緯と現状	5．発行年 2020年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加藤大鶴	4．巻 15
2．論文標題 漢音漢語における去声＋去声の連接および後項の「声調」変化―尊経閣文庫蔵『色波字類抄』（三巻本）を用いて―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加藤大鶴	4．巻 55
2．論文標題 20世紀初中期に刊行された辞典における漢語アクセントの基礎的分析―奥村「漢語アクセント類別語彙」の検証のために―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 跡見学園女子大学文学部紀要	6．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐藤栄作	4．巻 15
2．論文標題 アクセントの把握と表記ーさまざまな報告に対応するためにー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 75-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山岡華菜子	4．巻 15
2．論文標題 近世後期から近代初期における「平上去」の解釈	5．発行年 2020年
3．雑誌名 論集	6．最初と最後の頁 55-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 加藤大鶴	4．巻 38-7
2．論文標題 字音声調から漢語アクセントが形成されるまで―「規範」から「逸脱」に視点を移すこと―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語学	6．最初と最後の頁 21-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 山岡華菜子
2．発表標題 近世国学者の記述にみる学問の継承　「四声観」を中心に
3．学会等名 第386回日本近代語研究会
4．発表年 2021年

1．発表者名 加藤大鶴
2．発表標題 因空自筆本『朗詠要抄』博士譜に反映する体系変化前のアクセント　和語と漢語の分析結果から
3．学会等名 アクセント史資料研究会
4．発表年 2021年

１．発表者名 坂本清恵
２．発表標題 長唄《鷺娘》の旋律におけるアクセント
３．学会等名 日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画『一節切譜の復元からみた長唄の旋律』
４．発表年 2022年

１．発表者名 坂本清恵
２．発表標題 長唄の音声－謡、義太夫節との比較から－
３．学会等名 日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画「能「安宅」と長唄「隈取安宅松」「勧進帳」」
４．発表年 2020年

１．発表者名 上野和昭
２．発表標題 開合名目抄について
３．学会等名 アクセント史資料研究会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

１．著者名 鈴木豊	４．発行年 2020年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 464
３．書名 日本書紀声点本の研究	

１．著者名 上野和昭	４．発行年 2021年
２．出版社 武蔵野書院	５．総ページ数 432
３．書名 名目鈔声点本の研究	

１．著者名 坂本清恵編	４．発行年 2023年
２．出版社 檜書店	５．総ページ数 435
３．書名 長唄の伝承―旋律形成に関する学際的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	上野　和昭 (UENO Kazuaki) (10168643)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	佐藤　栄作 (SATO Esaku) (80211275)	愛媛大学・教育学部・教授 (16301)	
研究分担者	鈴木　豊 (SUZUKI Yutaka) (70216456)	学校法人文京学院　文京学院大学・外国語学部・教授 (32413)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	加藤　大鶴 (KATO Daikaku) (20318728)	跡見学園女子大学・文学部・教授 (32401)	
研究分担者	山岡　華菜子 (YAMAOKA Kanako) (10803140)	日本女子大学・文学部・研究員 (32670)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関